

謝冰心の一面

——したたかさ——

萩野 脩 二

謝冰心 (Xie Bingxin 1900~99。以下、冰心と略称する)^①と云えば、日本人の多くの人に説明抜きでわかった人物でした。その理由の1つには日本と関係が深いということがありました。

彼女は日本には、戦争前にアメリカへ行く途中に2回立ち寄っています。また、戦後すぐに5年間ほど日本に滞在しました。それ以外に、さらに5回日本に来ています^②。こんなに多く日本に来た作家も珍しいです。

冰心の父親・謝葆璋 (1865~1940)^③は日清戦争^④に参加しています。1895年2月5日、戦艦「来遠」の砲兵として日本の艦船と戦いました。威海衛の海戦で、「来遠」号は魚雷に当たり沈没しました。彼は海に飛び込み、泳いで劉公島に着き助かりました。その後、謝葆璋は同郷の先輩・薩鎮冰 (1859~1952) に呼び出されて、北洋海軍の巡洋艦「海圻」の副艦長になり、1903年の冬、煙台海軍学堂の初代の監督 (のちに校長と言う) になりました。冰心は父親の山東省の煙台 (芝罘と昔は言いました) 赴任により、福州から煙台に移住し、渤海湾の海を見て幼児期を過ごしたのでした。

1911年の辛亥革命で、清朝は倒れました。父親の謝葆璋が新たな海軍の本部詰めとなり、北京に移ったので、以後、ずっと北京で過ごすことになります。1919年の五四運動の時は、北京の学生のデモ行進があった明るる

日から、冰心は学生運動に参加し、「文書」係りになりました。また、義捐金を得るための刺繍作りの手伝いなどをしているので、五四運動に参加したという実感と誇りとを持っています。

冰心は病弱な母親（楊福慈，1870～1930）を見て育ったため、母親の病気を治す医者になろうと理科系を目指しましたが、数学を小学校から勉強していないのでまるで理解できませんでした。それで仕方なく、理科系を諦めました。また、文章が書けるということで学生運動に参加したこともあって、協和女子大学文科に転じました。この学校はミッションスクールで、校長として、ジョン・レイトン・スチュアート（1876～1962）^⑤が着任し、燕京大学に統合されます。スチュアートと言えば、アメリカの駐華大使となり、毛沢東により「さらば、スチュアート」^⑥という文章を発表されて、有名になったクリスチャンです。もともとは、中国にキリスト教を広めるために、高等教育を備えた中国人の牧師を養成しようとミッションスクールの経営に当たった人物です。

冰心は、早くから、キリスト教の団体の雑誌^⑦に詩や文章を発表していました。彼女は英語が堪能であったようです。それで燕京大学の英語の先生であったグレース・ポイントンの推薦で、アメリカのウェズリー女子大学に奨学金を得て留学することが出来ました。1923年のことです。ウェズリー大学は、ポイントンの母校です。アメリカの元国務長官のオルブライト女史や、クリントン大統領の夫人・ヒラリー女史が出るなど、大変有名な女学校であります。マイク・ニューウェル監督、ジュリア・ロバーツ主演の『モナリザ・スマイル』という映画の舞台になった大学でもあります。冰心の留学時期についての研究には牧野格子氏の学位論文があります^⑧。

冰心は、1919年「両箇家庭」という短篇小説で文壇に出て、以後、「超人」などの短篇小説や『繁星』や『春水』といった短詩（当時は「小詩」と言いました）を集めた詩集を出版し、有名な女性作家となっていました。魯迅の弟である周作人の授業を受けたこともあります。周作人や茅盾、鄭

振鐸などが集まった文学研究会の会員にもなりました。文学研究会は、郭沫若や郁達夫、成仿吾などが属したロマンティックな団体である創造社と違って、どちらかというとな静謐な文体で生活の一コマを描こうとすることに重きを置いた団体で、『小説月報』という雑誌を主な舞台として活躍した団体です。

彼女はプレジデント・ジャクソン号という船に乗って留学に行く途中、船の中で出会った青年・呉文藻（1903～78）^⑨と後年結婚することになります。呉文藻は、近代的な学問としての社会学を中国に根付かせた人物です。弟子の中に費孝通、林耀華^⑩などがおります。

冰心と呉文藻の出会いは、人違いからおきたというエピソードがありますが、許地山（筆名：落華生、1894～1941）などの冰心に対するファンというか信奉者がたくさんいた中で、朴訥な呉文藻が冰心の心を捉えたようです。伝えられているところでは、いささか作家として得意であった冰心に対して、学問教養のなさを呉文藻が突いたからであったようです。自らの欠点をずばりと指摘された冰心は却ってすっかり呉文藻に傾倒したようです。

冰心は、アメリカのマサセッチュー州のウェズリー・カレッジの修士課程に留学中に、『寄小読者』という手紙形式の通信文を書きました。これは北京で出ていた『晨报』という新聞の「児童世界」という副刊（特集頁）に掲載されました。それで、この通信文を集めた『寄小読者』は児童文学の本とされています。しかし、この本は、児童にアメリカを紹介するような内容ではなく、冰心がアメリカに着いてすぐ病氣入院し、サナトリウムで1年近く療養した時の自分の心の軌跡が描かれています。その祈りにも似た生命への葛藤の表出は、大人が読むに堪えうる文学書であるといえます。

呉文藻は留学生として最も熱心で優秀な学生として表彰されたことがあります。アメリカのコロンビア大学で博士号を取り、1925年に帰国して、

ジョン・レイトン・スチュアートの下で、キリスト教式の結婚を、現在の北京大学臨湖軒でおこないました。

日中戦争が始まると、冰心一家は、雲南の昆明に行き、四川の呈貢に移り、その後蒋介石夫人の宋美齡から、ウェズリー大学同窓のよしみで、新生活運動婦女指導委員会（1934-1940）に入ります。1941年1月の皖南事変の頃から第二次反共のムードが高まり、国民党統治区的女性運動にも影響し出しました。例えば国民党は委員会の農村奉仕活動を、共産党の違法な女性運動とみなして、取りつぶしにかかりました。冰心がこの会に入った頃には、女性たちの抗戦を指導する組織としての機能はほとんど麻痺していました。

冰心は、国民党から追い出された沈茲九（1898～1989. 胡愈之夫人）の後任として、文化事業組組長の任につきました。具体的には《婦女新運月刊》、《婦女新運通訊》（半月刊）、《婦女新運週刊》、《婦女新運双週刊》等の刊行物や宋美齡言論集の出版、《抗戦建国与婦女新生活》等の叢書の出版、宋美齡文学賞の設立などの仕事をおこなうことでした。

冰心は「新生活運動婦女指導委員会、文化事業組組長」に就任し、重慶に移り住みました。しかし、冰心は宋美齡との関係から組長になったものの、国民党と一線を画すために、6ヶ月足らずでこの職を辞し、この間の給料も返金したのでした。これらのことは、青柳真理氏の修士論文があって、以上の経緯は青柳氏の文章から要約しました^⑩。

冰心はきわめて清楚な小柄な体格容貌で、可愛らしく、そして、児童文学書を書く優しい心根の人物と見られています。しかし、この「新生活運動婦女指導委員会、文化事業組組長」の辞職をめぐる問題でも、かなりはっきりと国民党の活動の広告塔になるのは嫌だとする態度が明確です。経済的な理由があって職に就いたにもかかわらず、6か月分の給料まで返金するというのは、冰心のしたたかさを示す行為でしょう。

この頃、冰心一家は、次女の宗黎つまり呉青が生まれたばかりで、経済

的にも苦しい時期でした。呉文藻も国民党関係の仕事につきます。イギリスの資金によって開講した雲南大学の社会学の講座も、1940年末、イギリスからの資金援助が凍結されてしまいます。呉文藻は雲南大学で教えることができなくなり、新たな職を見つけなければならなくなりました。この頃から、冰心も呉文藻も国民党との接点を持つようになったのでした。呉文藻は清華大学の同窓である浦薛風と顧一樵の勧めで国防最高委員会の参事室で勤務しました。そして、1945年9月、日本の全面降伏のあと、呉文藻は中国駐日代表団の政治組長兼対日委員会中国代表顧問に任命されました。中華民国の駐日軍事代表団団長をつとめる朱世明が呉文藻を推薦したからです。呉文藻も自分の研究のためにも有利であると判断して、日本へ来ることにしました。呉文藻が生活のためであっても、かなり積極的に国民党のために仕事をしたことは、留意しておいて良いことでしょう。後の反右派闘争及び文革の時期に、有利な履歴としては残らなかったであろうと予測できるからです。

この日本滞在期間、冰心は倉石武四郎氏の尽力で、東京大学の講師となり、日本の学生に新中国の状況をなるべく多く伝えようとしていました。冰心がおこなった講演は1冊の本にまとめられています^⑩。中国の詩人達が屈原より聞一多（1899～1946）まで、如何に政治に関与したかを述べています。

当時冰心の講義の通訳などを担当したのは、竹内実氏です。竹内氏はこんなことを伝えています。例えば、東大での最終講義で、冰心はアメリカ軍基地について言及した。通訳であった倉石武四郎先生は、わざとそこを通訳せずに飛ばしてしまい、その場に居合わせた学生は相当驚いた、と。また学生が毎日のように軍事基地反対のビラを配っており、そのビラの内容を冰心に尋ねられた竹内氏が「……と書いてあります」と訳すと、冰心は努めて客観的に訳した竹内氏に軽い皮肉を言ったとあります^⑪。

総じて、冰心の日本滞在時期は、徐々に新中国すなわち中国共産党への

賛美を、腐敗する国民党に対する批判という形で述べ、強調し出す時期でした。そうして、呉文藻がアメリカのイエール大学に招かれたのをきっかけにして日本を出国し、急遽香港に向かい、中国共産党が支配権を確立した大陸に戻ったのでした。

以上、これまで描いてきた冰心像は、どちらかと言うと、可愛い純粋な人物で、児童文学作家というイメージから、実質的には、案外したたかで、しぶとい人物なのではないか、ということです。したたかと言うのは、安易に他者の思惑通りにならず、誠実から出た自己の思考に忠実で、行動力を伴っていると言うことであります。以上の例からだけでも、政治的にも決して逃げない、一定の方向性を持って、それを曲げない人物であるように思えます。

二

冰心のしたたかさの、より具体的な形として、反右派闘争時期を見てみたいと思います。

反右派闘争そのものについては、辞典的な知識で済ませておきます^④。

中国共産党が毛沢東主導の下に1957年から1958年前半に展開した、“ブルジョア右派”に反対する闘争です。

ソ連のフルシチョフによるスターリン批判と毛沢東の“百家斉放、百家争鳴”政策に影響されて、1956年後半に、民主諸党派の指導者及び知識人・学生たちが、中国共産党の急激な農業集団化政策（人民公社）に反対し、中国共産党の独裁化に反対する意見を表明しました。

中国共産党が右派と認定した基準は、社会主義制度、共産党の指導および政府の政策に対して批判的な立場をとったもの、彼らと行動を共にしたものというきわめて曖昧、広範なものでした。さらに、各職場や地域の党組織に一定の割合の人間を右派とすることを指示しました。その結果、だいたい56万人の人が右派となりました。1959年9月と1962年4月に名誉回

復がなされましたが、あまり徹底的ではなく、1978～1980年にかけての再審査でやっと右派というレッテルが剥がれたといえます。

ここで言う、「百家斉放，百家争鳴」（「双百」と略称します）について、簡単に触れると、中国共産党が1956年に唱えた自由化政策のスローガンのことです。芸術の分野で異なった様式・内容の作品を自由に発表させ、学術の分野で異なった学説や理論を自由に発表・論争させること、を意味していました。

1956年に、工業商業の社会主義的改造が基本的に完成したとされると、これ以後は、経済建設が中心となりました。そうなれば、知識人の協力が必要です。そこで、民主諸党派との長期共存，相互監督というスローガンが打ち出され，“双百”を基本方針とするようになったのです。

この間の動きを，年表的に示すと次のようになります。

1956年4月政治局拡大会議 → “双百”の方針を提起

5月26日陸定一講演 → “双百”の行動を促す

1957年2月27日毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」講演。→党外の人士が共産党の官僚主義を批判するよう要請

この間（56年6月～57年6月）章伯鈞民主同盟副主席，儲安平『光明日報』総編集らが共産党の政策を批判する意見を発表

1957年6月毛沢東 共産党の指導権を攻撃した勢力を，ブルジョア右派として弾圧するように指令。→6月8日『人民日報』社論「これはどうしたことか？」→反右派闘争の始まり

6月19日「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」公表
→6か条の基準が付け加わる。党の指導や社会主義に対する攻撃は容認できない。など

以上の流れを要約すれば、1956年の“双百”政策があって、ここで知識人の不満を解消し、彼らの協力を得て、経済建設に向かおうしたのです。ところが、知識人の不満や批判がたくさん噴出したのでした。最初は、知識人たちはものを言わなかったのですが、陸定一（1906～96）といった当時、党中央宣伝部部長という思想面の最高責任者まで先頭に立って演説し、“双百”を進めるよう促したので、知識人たちは口を開き始めるのですが、どちらかという正直に欠点を指摘し、虚偽を許容しない知識人の言説は、正当で正確を期するがゆえに厳しく、相手の度量を越えてしまったといえるかもしれません。知識人達の意見は正しかったかもしれませんが、時代状況や政策の方向などを見失い、正しさにのみ専念して、場合によっては社会の障害となるものとなりました。

三

ここで、費孝通についてみてみたいと思います。費孝通は、呉文藻が育てた、最初の弟子でありました。中国の師弟関係は、自宅に招き寄せて、生活から就職の世話を含めた関係を言いますから、日本以上に人情に篤い、身内のような関係を指します^⑤。その、費孝通は百家斉放、百家争鳴の政策の下、2篇の文章を発表しました。そのうちの1篇は「知識分子的早春天気」というものです。これは、『人民日報』1957年3月24日に掲載されました^⑥。

費孝通は、この文章の中で、高等教育に携わっている者の気持ち（心情）を語るとしています。彼が語る内容は、大体以下のようなことです。

以前には生活条件が悪かったが、1956年1月の周恩来総理の知識分子問題に関する報告が出て以来、生活条件が良くなった。現在は業務を向上させるのを援助することだ、と言って、いろいろ例を挙げます。その例の中に共産党の不徹底な点が挙げられているのですが、ここでは仔細に検討しません。

費孝通のこの文章は多くの賛同者を得たのですが、反右派運動が始まると、右派分子の言説として、批判に晒されます。そして、1957年7月12日には、冰心がこれを批判し、翌13日には、費孝通が自己批判を述べるに至ります。

冰心の批判は、費孝通は知識分子の気持ちを代表していると言うが、それは一部の大学教授のものであって、大多数の知識分子のものではないというものです^⑩。

費孝通自身の自己批判である「向人民伏罪」^⑪は、14項目にわたって具体的な事例を挙げて検討していますが、それは自分が所属していた、中国民主同盟の副主席・羅隆基（1896～1965）と、同じく副主席・章伯鈞（1895～1969）、そして、副主席で中国民主同盟の機関紙『光明日報』総編集でもある儲安平（1909～66）との関係です。当時、章羅同盟として、反党反社会主義分子になった中国民主同盟の組織的行動としての自己批判でした。

こう見ると、冰心の批判は一見宙に浮いて見えます。きわめて抽象的な、心情の論に終始しているからです。でもよく読めば、費孝通がなすべき方向を指し示してもいるとも言えます。

そこで、もう少し詳しく冰心の言うところを見てみます。

冰心は、費孝通の意見を、500万の知識分子の中ではごく少数の大学の教授たちの意見を代弁しているに過ぎないと言います。彼らは抗日戦争以来人民大衆から離れ優雅な生活を送ってきた者だ、と断定します。だから「ブルジョア個人主義、ブルジョア民主の観念、ブルジョア生活様式……こういったもの全てが、頭の中に根を深くしヘタを硬くして充満している」^⑫と言います。こういった個人的利益から、彼らは、現在活躍躍進している周囲に対して、自分を「片隅」に置き、不平や恨み言を言い、消極的な気分にいるのだと批判するのです。こういうブルジョアの理論が頭に詰まっているから、羅隆基・章伯鈞といった野心家に捉まり利用されるの

だ、とも言っています。

最後に、共産党はおおらかであり、人民は過ぎたことを咎めないから、当然前非を悔い改めねばならない。人民に赤裸々に自分の重い誤りを認めれば、社会主義の大きな門が開かれているのだ^⑩、と言って結びます。

冰心の、「人民に赤裸々に自分の重い誤りを認めれば、社会主義の大きな門が開かれているのだ」という言葉が、翌日の費孝通の自己批判を容易にしたのでありましょう。少なくとも冰心は、そのように勧誘したのであると思います。

しかし私は、事はそんなに単純ではなく、錯綜したものが背後にあったに違いないと思っています。冰心のような言葉で、翌日すぐさま自己批判するなら、実に安易ではないかと思うことが一つの根拠です。また、なされた費孝通の自己批判の内容が、冰心の批判を超えて、政治的に重いものであるように思えるからです。

したがって、費孝通の自己批判と、冰心の批判とは、形式上のことであって、内容としての関連は殆どなかったと言えるでしょう。せいぜいきっかけを作ったと言える程度でしょう。費孝通には彼なりの切実な背後関係があって、冰心の批判があろうとなかろうと、自己批判をして、この場を切り抜けねばならなかったのでしょう。

それよりも、冰心が批判演説に立ったのは、自身の政治的立場を明らかにする必要があったからだろうと思います。彼女は、もちろん中国共産党員ではありません。1956年7月に中国民主促進会に、雷潔瓊と嚴景耀の紹介で、呉文藻とともに加入しています^⑪。所謂民主諸党派の1員なのです。だから、ぜひとも批判者の側に立って、自らの位置を明確にしなければならなかったに違いありません。所謂「表態」を明確にしなければならなかったのでしょう。だが、批判の論は具体的な行為をあげつらうわけではありません。ここにワンテンポずれた何かがあるに違いないと思います。

冰心の家庭に眼を向ければ、夫の呉文藻が1957年10月に右派とされてい

ます。また長男・呉平も1958年3月に右派とされ、弟の謝為楫も1958年4月に右派とされたのでした。中でも夫が10月に右派とされたならば、それまでに職場単位で批判会が何度となく開かれたに違いありません^②。

右派分子と認定され、「反党反社会主義」とされたことは、承服しがたい、衝撃的なことであったと思います^③。

つまり、冰心が苦勞して日本から帰国した新中国において、やむを得ぬ過去の経歴や、共産党が指示して言わせた意見が、「反党反社会主義」の言説となり、右派に認定されてしまったのです。夫をはじめとする家族への心からなる同情をどのように表現してよいかわからぬ時期があったに違いありません。このからくりの不当な点を、しかし、あげつらってばかりいるわけにはいかないのが、「鬭争」というものでしょう。ですから、この危機的状況は、冰心自身にも襲って来ないわけではなかつただろうと推測できます。

だからこそ、冰心は批判者として、晴れがましい人民大会場で、夫の弟子に当たる費孝通の意見を皆の前で批判しなければならなかつたのだといえます。そこに私は、冰心のしたたかさを見るわけですが、ただ現在のところ、冰心の苦悩を証明する彼女の「検討書」(=自己批判書)をまだ見ることが出来ない^④ので、冰心の費孝通批判というものは、実は冰心自身の自己弁明の意見であったことを指摘して、この小論を終了いたします。

* 以上は、2005年7月23日に行われた、現代中国研究会の、公開講座で発表したものに手を加えたものである。 (2005. 10. 12)

注

① 謝冰心の伝記的紹介として、拙著「冰心と“大海”——冰心試論」(狭間直樹編『中国国民革命の研究』(京都大学人文科学研究所、1992年3月、所収)などを参照されたい。

② 冰心の訪日について、

1. 1955年8月 第1回原水爆禁止世界大会 18日間
2. 1961年3月～4月 第2次アジア・アフリカ作家会議常務委員会緊急会議
3. 1963年10月～11月 中国作家代表団（巴金団長）
4. 1973年4月～5月 中日友好協会訪日代表団（廖承志団長）
5. 1980年4月 中国作家代表団（巴金団長）

以上の5回日本に来ている。

- ③ 冰心の父親・謝葆璋については、拙著「冰心の父親について」（関西大学文学部中国語中国文学科編『文化事象としての中国』関西大学出版部，2002年3月，所収），及び「冰心の父親について——その2」（『関西大学 文学論集』第51巻第4号，2002年3月，所収）などを参照されたい。
- ④ 中国では甲午戦争と言う。1894（明治27，光緒15）年から95年までの戦い。1894年が甲午（きのえ・うま）の年である。
- ⑤ John Leighton Stuart（中国では司徒雷登と表記される）については、拙著「謝冰心とスチュアート——燕京大学を中心に」（『関西大学 文学論集』第54巻第4号，2005年3月，所収）を参照されたい。
- ⑥ 「別了，司徒雷登」（『毛沢東選集』4，1948年8月18日）。
- ⑦ 北京基督教学校事業連合会編『生命』に計17篇の詩と燕京大学を紹介する文章とを載せている。
- ⑧ 牧野格子「謝冰心 アメリカ留学時期の研究」。2004年9月，博士（文学）取得。
- ⑨ 呉文藻の伝記については、晋陽学刊編集部編『中国現代社会科学家伝略』第6輯（山西人民出版社，85年9月）や、『文献』雑誌編集部・『図書館学研究』編集部編『中国当代社会科学家』第8輯（書目文献出版社，86年11月）などを参照した。
 なお、王慶仁，馬啓成，白振声主編『呉文藻紀念文集』（中央民族大学出版，1997年10月，312頁）があり、「附録I」に中央民族大学紀念呉文藻先生誕辰95周年準備委員会による「中国著名学者 呉文藻先生紹介」があるが，1957年に関しては，「1957年他被錯劃為右派，使他的才華被压抑了二十多年」と述べるに過ぎない。（301頁）
- ⑩ 費孝通（1910.11.2～2005.4.24）の伝記については、小島晋治「費孝通氏の歩んだ道」（訳者解説）{費孝通・小島晋治ほか訳『中国農村の細密画——ある農村の記録 1936～82』研文出版，1985年12月。所収} や、大里浩秋「費孝通小伝」{費孝通・大里浩秋，並木頼寿訳『江南農村の工業化——

“小城镇”建設の記録 1983～84』研文出版，1988年5月。所収）などを参考にした。

なお、費孝通『往事重重』（遼寧教育出版社，1998年3月，266頁）には、「知識分子的早春天氣」と「“早春”前後」が収められている。

また林耀華（1910～2000.11.27）は、ハーバード大学で博士号を取得した人類学者であるが、反右派闘争の時、呉文藻を最も積極的に批判したことで有名である。

- ⑪ 青柳真理「謝冰心考——3つの点から見る日本滞在期」（修士論文）

茨城大学 西野由希子氏のHPアドレス

<http://homepage3.nifty.com/yukiko/nishinoGakusei/aoyagi/>

- ⑫ 謝冰心・倉石武四郎訳『中国文学をどのように鑑賞するか』（大日本雄弁会講談社，昭和24年9月，169頁）。

- ⑬ 竹内実「謝冰心先生のこと——訳者あとがき」（謝冰心著・竹内実訳『女の人について』朝日新聞社 1993年）193頁

- ⑭ 天兒慧，石原享一，朱建栄，辻康吾，菱田雅晴，村田雄二郎編『岩波 現代中国事典』1999.5.20. を参照した。この「反右派闘争」の項目は，安藤正士担当。

なお，内閣官房内閣調査室編『中共人民内部の矛盾と整風運動』（大蔵省印刷局，1957年11月，497頁）も参照した。

- ⑮ 費孝通「呉文藻先生誕辰95周年記念会 中央民族大学名誉校長費孝通副委員長在紀念会上的講話」{王慶仁，馬啓成，白振声主編『呉文藻紀念文集』（中央民族大学出版，1997年10月，所収）}でも，次のように言う。

以前の師生關係同現在有所不同，学生与老師的關係是從親屬關係延伸出来的。中国社会基本關係是親屬關係，親屬關係從血緣上決定了人与人的關係，親屬關係延伸出去就成為師生關係。（1頁）

- ⑯ 費孝通「知識分子的早春天氣」は、『新華半月刊』1957年第8号（4月15日。109～112頁）に轉載された。今それに従う。注⑩も参照されたい。

- ⑰ 冰心的發言「一面堅決地闘争，一面徹底地改造」（『新華半月刊』1957年第17号，9月10日）51～52頁。1957年7月12日發言。

この文章は，卓如編『冰心全集』全9卷（海峡出版社，1999年4月。豪華珍藏本）には未収である。

- ⑱ 費孝通的發言「向人民伏罪」（『新華半月刊』1957年第18号，9月25日）57～59頁。1957年7月13日發言。

- ⑲ 同注⑰ 52頁

在這些知識分子一方面，喘息甫定，也有一時期的欣悅寧靜敵心情，但是他們是在資產階級的思想意識的雪地上滾大了的：資產階級個人主義，資產階級民主觀念和資產階級生活方式……這一切都根深蒂固地盤踞充塞于脑海之中。因此，在我國社會主義革命的大轉變中，個人利益和集體利益起了一定的矛盾的時候，他就改變了。

⑳ 同注⑰ 52頁

共產黨是光明磊落的，人民是不咎既往的，他們應當痛改前非，向人民赤裸地承認自己嚴重錯誤，“敗子回頭金不換”，天清氣朗，花木蔥籠的社會主義改造的大門，還是向着他們敞開的！

㉑ この辺の事情については、拙著「謝冰心の作家魂——一片の冰心」（『日本中国学会報』第五十六集，2004年10月，所収）を参照されたい。ただし、十分な資料的根拠を持ち得なかった。王炳根・冰心文学館常務副館長に拠れば、冰心文学館は、呉文藻のこの時期の日記を2004年3月に収蔵したそうなので、その公開が待たれる。

㉒ この間のことは、注㉑に書いたように、冰心文学館の公表を待つしかない。

㉓ 「我的老伴——呉文藻（之二）」や、「周恩来総理——我所敬仰的偉大的共產黨員」などの冰心の文章を参照。

㉔ 冰心の「検討書」については、王炳根氏の教授によると、『文学報』2001. 3. 29（第1205期）李一信「冰心的《検討手稿》」がある。この記事に拠れば、「向左転，開歩走」という検討手稿があることと、「自我検討及今後努力方向」という文章があることが知られる。

「向左転，開歩走」の中では、「冰心接着拿《西遊記》作鏡子对自己的靈魂進行了剖析。」とあるように、自分を観音菩薩の手のひらより脱出できない孫悟空になぞらえている部分があるようである。

なお、卓如『冰心年譜』（海峡文芸出版社，1999年9月）に拠れば、「向左転，開歩走」は、『光明日報』1958年2月16日に掲載されたことになっている。